

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 13 日現在

機関番号：32634

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25750099

研究課題名(和文) 疫学の歴史からみた近代日本の医療環境と地域社会

研究課題名(英文) Medical Environment and Regional Community in Modern Japan from the Perspective of Epidemiological Survey

研究代表者

廣川 和花 (Hirokawa, Waka)

専修大学・文学部・准教授

研究者番号：10513096

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、日本における疫学の移入・学問形成のプロセスを、医学の国際的状況という背景、および疾病構造転換による社会医学的関心の高まりの視角から検討した。疫学や社会調査が対象としたさまざまな地域と人間集団に関して蓄積されたデータを分析することによって、疫学調査そのものの導入の背景についての分析を深めるとともに、歴史資料として調査データを分析することにより、調査当時の地域における人々の健康や生活環境・医療環境に関する知見をも引き出すことができた。

研究成果の概要(英文)：In this research, I examined the process of introducing epidemiological survey and its establishment in modern Japanese medicine from the viewpoint of the international background of medical research and the rising interest in the social medicine according to the health transition. Examining the epidemiological surveys on various communities and human groups accumulated by the field work made it possible to understand the contexts why epidemiology became important for the medical research in the 1920s-1930s in Japan. In addition, it became clear that the survey data provides historical research on the regional community with a lot of useful information about people's health, economic status, education and their living condition.

研究分野：近代日本医学史

キーワード：疫学 ハンセン病 地域社会

1. 研究開始当初の背景

疫学は、ある特定の人間集団における健康状態とその要因の分布を明らかにする医学または公衆衛生学の一分野である。初期の疫学は、病原体や感染経路の不明な急性感染症対策において有効性を発揮したが、医学の進歩や疾病構造の転換に伴い、非感染症や慢性疾患にも対象を広げてきた。今日では、成人病や生活習慣病、長寿や健康増進の疫学も盛んに行われている。同時に、水俣病などの公害・環境汚染・薬害など戦後の社会問題の実態解明において、疫学は加害と被害の因果関係を証明する有力な手段として浮上した。また広島・長崎の原爆被爆とチェルノブイリ原発事故に係る放射線疫学は、東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所事故後、改めて注目が高まっているところであった。

このように、近現代の社会と科学の接点に生起する、人々の健康や生存に密接に関わる諸問題が、特定の原因と結果をもつ社会問題として認識され、その解決を目指す営みにおいて、疫学の持つ重要性は増大し続けているといえる。これは、疫学が特定の社会集団の構造とその変化を対象とし、その成果が公衆衛生施策として具体化する医学であるためである。その歴史的・社会的役割を明らかにすることは、まさに医学(科学)と社会の関係性の歴史学において焦点となると考えられた。

しかし、医学史・科学史研究において、学問としての疫学の理論的・方法論的発展およびその政策等への応用過程に関する学術研究は、きわめて乏しい。過去の疫学調査のデータは、各時代や地域社会における人々の健康状態や医療・生活環境を明らかにする「生存の歴史学」の貴重なリソースとなりうるが、これを有効に利用する研究はほとんどなかった。そこで、疫学およびそれに密接に関連する地域調査の手法の学問としての発展過程を、科学史・医学史の文脈においてとらえ、そこで得られる知見や蓄積されたデータを、歴史的な地域社会分析の方法論の深化のために活用すべきであると考え、研究に着手した。

2. 研究の目的

研究代表者はこれまで、主に近代日本のハンセン病問題の歴史を、医学研究とその政策的応用の場としての地域社会との関係に着目して研究してきた。ハンセン病医学は1930年代には感染経路の未解明・菌培養の不成功から停滞期にあったが、それまでの統計調査的手法に加えて疫学があらたな研究手法として日本に導入されたことによって、医学者らはフィールドワークを通じ地域における流行状況や患者の生活実態に目を向け始めた。疫学調査を通じ明らかにされた地域の医療・衛生および疾病環境は、医学者らの地域における患者という存在のとらえ方を変容させ、医療政策と社会の医療環境にも変化を

与えた。

このような医学のあらたな動向は、社会科学の方法論とも密接に関連しており、都市や農村に噴出する社会問題をそれぞれの地域社会固有の問題としてとらえ、その原因を究明しようとする社会調査の問題意識とも相互に関連していたと考えられる。

本研究では、学術的手法としての両者の確立過程を明らかにし、次に実際の地域医療や医療政策においてこれらの調査研究の成果が応用されてゆく過程を具体的事例に基づいて把握することで、そこに見出されるそれぞれの地域社会の構造や歴史的特質をも考察することを目的とする。医学史としての疫学の展開を追うだけでなく、その学問的基盤にあり、政策を通じてその影響をも受ける地域社会との相互作用を明らかにすることまでを射程に入れるものである。

3. 研究の方法

(1) 資料の所在情報の収集および史料調査

研究代表者にとって既知の史料群に加えて、研究協力者からの情報提供を集約し、多様な観点から史料調査を進めた。第一段階として、主に国内における資料保存機関や図書館等を利用し、日本における初期の疫学の移入・形成にかかわる基礎的資料を収集し、先行研究がほとんど無い状況にあって、研究全体の見取り図を得ることを第一段階の到達目標とした。

(2) 医学の国際的交流に関する史料調査と科学史としての位置づけ

疫学・社会調査それぞれの歴史と相互の関連性・分化の過程を明らかにするための資料調査を行う。本研究課題の対象である疫学と社会調査の方法論は、いずれも西洋諸国から移入された学問分野であるため、海外で先端的に展開された理論とその移入、日本国内での展開を対照させて検討した。アメリカ・イェール大学医学史図書館などに所蔵される資料も調査対象とした。海外の疫学・地域調査理論の発展の歴史を参照しながら資料の分析を進めた。

(3) 疫学の視角を生かした地域社会の歴史研究

研究の文脈や手法の歴史的過程をふまえながら、過去の疫学・社会調査のデータを、歴史資料として具体的な地域史研究に活用できるようにデータの分析方法を工夫した。疫学と社会調査が対象としたさまざまな地域と人間集団に関しての蓄積されたデータから、地域における人々の健康や生活環境・医療環境に関する知見を引き出すことを主眼とした。

4. 研究成果

(1) 近代日本の医療と公衆衛生システムの構築と疫学

近代日本における医療と公衆衛生のシステムの確立は、おおよその枠組みとしては、

急性感染症対策から慢性感染症対策、さらに生活習慣病対策へと、疾病構造の転換とともに進められてゆく。従来の研究では、医療の近代化のプロセスは、1875年(明治8)の「医制」の成立や「開業医制」の変遷などの制度史的な側面と、公衆衛生対策(実質的にはコレラ対策)を通じた国民統合の過程についてもっぱら論じられてきた。後者については、維新変革期における民衆騒擾の一種としての「コレラ騒動」、都市下層社会史における排除と包摂の契機としてのコレラ対策という二つの局面においてである。しかしこうした一連の襲来型急性感染症対策が一段落した後に、疾病構造が常在型急性感染症へ、さらに慢性感染症と転換し、公衆衛生対策もそれに合わせて変容していく過程は、ほとんど明らかになっていない。その結果として、1930年代に対処すべき慢性感染症としてハンセン病・結核・花柳病・精神疾患対策が浮上する医学的な文脈も、十分に解明されているとはいえない。このように近代日本の医療と公衆衛生システムに関する研究は、明治前期と総力戦期に集中し、その間の期間の実証研究が乏しいため、依然として通時代的な見取り図を描けていないのが現状である。そこで、この研究の空白期間を埋めるために統計学・疫学的手法の導入が日本医療の近代化に与えた影響を検討するという視角を導入することが有効であると考えに至った。

(2) 疾病対策の一貫としての疫学導入

収集した資料を整理した結果、ひとまず研究代表者にとって前後関係の理解が進んでいるハンセン病を素材として、統計学・疫学導入の意義を検討することとした。

近代日本のハンセン病対策は、1907年(1909年施行)の明治40年法律第11号「癩予防二関スル件」に始まり、これによりいわゆる「無資力」患者、実質的には住み家を持たず浮浪する患者が療養所への収容対象とされた。この政策が前提条件としてもつ近世から明治後期に連続する日本のハンセン病者の存在形態は、一部に地域社会を離れ周縁的身分に編成される病者がいる一方で、その多くは在村(在宅)であったと考えられる。1907年法の下で収容対象となる「浮浪患者」が患者全体からみれば少数であることは、このことを踏まえれば自然に理解されうる。この状況は法制定以降も1930年代まで続き、把握されている患者の過半数が施設に収容されるのは1940年代に入ってからである。したがって、近代日本のハンセン病問題は地域社会における近世的な病者の存在形態を前提に構想され、それを継承しながら展開してきたものにとらえるべきである。すなわち先行研究にみられるように総力戦期のファシズム政策との関係でハンセン病政策を論じることは不十分である。

次に課題となるのは、明治後期に開始される日本のハンセン病政策の性格を、国際的状況との関係性において検討することである。

日本の公衆衛生対策、とりわけハンセン病対策が、開港と内地雑居の開始を期に外国人から得られる反応を意識したものであることはしばしば指摘されるが、それらはあくまで理念レベルの契機にすぎず、政策の具体的な開始時期の説明としてもそくわない。より重要な背景は、ハンセン病問題が世紀転換期に植民地を巻き込んだ国際問題として浮上してくることであり、その枠組みにおいてとらえられた日本の疾病環境全体、そしてハンセン病の実態とイメージであった。

このような植民地経営の論理を含み込んだハンセン病をめぐる状況下で、欧米先進諸国はハンセン病医学研究を進展させ、統計学的手法により流行を可視化し、流行地域の状況をとらえようとする試みの中で疫学調査の方法を発展させることとなった。

そこで、19世紀後半以降の欧米列強の植民地におけるハンセン病問題の浮上から、各地域における流行状況の調査およびそこでのハンセン病医学の進展に加え、医療宣教師による救済事業の展開をあわせて検討することで、ハンセン病問題の国際的状況と日本の国内問題を結びつけて検討することとした。

(3) 日本への疫学導入と政策への反映

1930年末、国際連盟癩委員会はバンコクで会議を開催し、続いて31年にマニラでレオナルド・ウッド・メモリアル会議が開催された。この会議を経て、国際癩学会 The International Leprosy Association が設立され、国際的なハンセン病医学の合意形成や知識の共有において重要な意味を持った。

ハンセン病は、20世紀の欧米先進国ではすでにほとんどみられなくなっていたが、植民地を含む世界各国では依然として蔓延していた。このことを問題視し始めた国際連盟保健委員会は、1925年にハンセン病に関する統計学的・流行学的調査を行うことを決議している。1928年5月にパリで開かれた第12回国際連盟保健委員会での癩委員会の決定を受けて、同委員会の Burnet は1929年1月よりヨーロッパ、南米10カ国を訪問、1930年1月から6ヶ月の間日本を含むアジア諸国を訪問し、ハンセン病の調査を実施した。その結果を Report on the Study Tour of the Secretary of the Leprosy Commission in Europe, South America and the Far East(1930)にまとめた。報告書は、各国ばらばらの政策・治療法・隔離方針などについて議論するために専門家が集まり議論することを提言した。

この提言を受けて、国際連盟の第1回国際ハンセン病会議が極東熱帯病学会に合わせて1930年12月7日にバンコクで開催される。ここでの総会報告は、ハンセン病予防のための国際標準を提示する目的で発表された。すなわち外来治療と隔離の併用である。続くマニラでの国際会議では、病型分類や臨床用語の統一などが図られた。中でもハンセン病流

行の地域的偏差の理由を解明するため、疫学調査の検査事項の標準化が決定されたことが注目される。改めて感染リスクの高い患者の隔離と外来治療の組み合わせという治療方針も確認された。

一連の情報は東北帝国大学の太田正雄を中心に日本にもたらされ、疫学調査の実施へと結びついた。1931年に日本のハンセン病政策は大きく転換し、「感染の虞のある患者」を収容する方針へと切り替わっている。この法改正によって、自宅にいて周囲への感染リスクを生じている患者もまた収容対象となっていた。この法改正は、収容の基準を患者の「資力」から「感染リスク」へと変更するものであったが、別の見方をすれば、収容されるべき患者の「貧しさ」の判定基準が変わったともいえる。法律自体は、必ずしも総ての患者の隔離を指示するものではなかったが、これ以降、日本では、実際の症状にかかわらず、患者の隔離収容は強化の方向に向かうことになる。

疫学研究が示した在宅患者からの感染の危険性は、このような政策転換とも一致していた。日本でハンセン病疫学調査を実施したのは隔離政策を推進する当時の日本のハンセン病医学研究の主流派とは一線を画する研究グループであり、ハンセン病を含む慢性疾患をめぐる国際的な議論を積極的に取り入れようとしていた。また、社会医学的な問題意識を共有してもいた。だからこそ、彼らはフィリピンの学会での合意事項に従い、ハンセン病患者に対し必要以上の隔離はせず、外来治療で対応し、その生活環境を改善することが妥当であると考えていた。しかし、彼らが国際的標準を参照して日本で行った実態調査からは、結果として患者が自宅にいての危険性が浮き彫りとなった。国際的な研究水準に合わせようとして進展した疫学研究は、結果として国際的な政策合意から離れた日本の隔離政策に親和的なものとなるに至る。

(4)20世紀の医学と疫学

疫学の導入がもたらす特定の社会的・政策的文脈における変化の過程は、医学の内部に止まらず、医学が新しい地域社会の構造把握の方法を獲得する瞬間でもあった。ある病気の患者を発見し、数量的に把握するための「フィールドワーク」は、20世紀前半の医学が獲得した新しい手法である。それは従来の西洋医学の三類型、すなわち「ベッドサイドの医学」、「病院の医学」、「実験室の医学」と複雑な関係をとって結んだ。三者はそれぞれ固有の社会的空間に成立していたが、疫学は、自発的に医療機関に向いて医療を求める人々だけでなく、潜在的な医療の対象とそうでない人々が混在する地域社会そのものを対象とし、従来の医療の営みに新しい機能を付加した。そしてそれは国際会議や国際保健医療機関を通じて世界的標準を形成して

いったために、医学的基準の国際化・平均化を促進するものともなった。1930年代日本の医学における疫学の導入は、このような背景を持ちつつ、日本固有の文脈における医療政策に反映されてゆくこととなった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

廣川 和花、医学史・日本史・アーカイブズのあいだで、科学史研究、査読無、271号、2014、293 - 295

廣川 和花、医学史資料のアーカイブズ化の課題と可能性、生物学史研究、査読無、291号、2014、53 - 58

廣川 和花、ハンセン病史研究のパスベクティブ：書評へのリプライにかえて、歴史科学、査読無、211号、2013、12 - 17

廣川 和花、趣旨説明、ハンセン病市民学会年報2013、査読無、2013、176 - 181

〔学会発表〕(計8件)

廣川 和花、The Introduction of Epidemiological Survey Methods for the Study of Hansen's Disease in Japan in the 1930s, International Health Organizations (IHOs): People, Politics and Practice in Historical Perspective、2016年4月21日、上海(中国)

廣川 和花、「和解」の時代のハンセン病史「顕彰」と「検証」をこえて、神奈川県ヘルスケア・ニューフロンティア「文化としての病と老い」研究会、2016年3月2日、慶應義塾大学(神奈川県横浜市)

廣川 和花、Entering the Era of Reconciliation: A Contemporary History of Former Hansen's Disease Patients in Japan、The 3rd International Hansen Forum、2015年9月17日、小鹿島(韓国)

廣川 和花、医療記録の保存と活用を目指して：医学史研究の立場から、2014年度文学部プロジェクト研究「岡山大学病院診療記録類の保存と活用」にむけた資料学的基礎研究」研究会、2015年1月23日、岡山大学(岡山県岡山市)

廣川 和花、New Perspectives on the History of Hansen's Disease (Leprosy) in Modern Japan: Beyond Commemoration and Denunciation、Embodied Histories: New Perspectives on Prostitution and Disease in Modern Japan、2014年3月26日、ニューヘイブン(アメリカ)

廣川 和花、A History Torn Between "Providing Relief" and "Inflicting Harm": Missionary Work for Hansen's Disease Sufferers and Local Communities in Modern Japan from the 1880s to the 1940s、The 18th International Leprosy Congress

2013年9月17日、ブリュッセル(ベルギー)
廣川 和花、フィールドサイエンスと医療
政策 1930年代のハンセン病疫学の営み、
科学コミュニケーション研究会第28回関西
支部勉強会、2013年2月13日、大阪大学(大
阪府豊中市)

廣川 和花、医学がフィールドにでるとき
戦前・戦中期におけるハンセン病疫学調査
と「検診」活動、病と社会・環境・科学技術
に関する近代史研究会(若手研究者研究力強
化型プロジェクト) 2013年1月27日、立
命館大学(京都府京都市)

〔図書〕(計2件)

Waka Hirokawa 他、Routledge、Science,
Technology, and Medicine in the Modern
Japanese Empire、2016、290

廣川 和花 他、工作舎、ハンセン病 日
本と世界 : 病い・差別・いきる、2016年、
369

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

廣川 和花 (HIROKAWA, Waka)

専修大学・文学部・准教授

研究者番号：10513096